



Title	イスラエル, エン・ゲブ遺跡の聖書考古学発掘調査
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教学, 29, 25-30
Issue Date	1994-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46541
Type	journal article
File Information	29_25-30.pdf



イスラエル、エン・ゲブ遺跡の聖書考古学

発掘調査

山 我 哲 雄

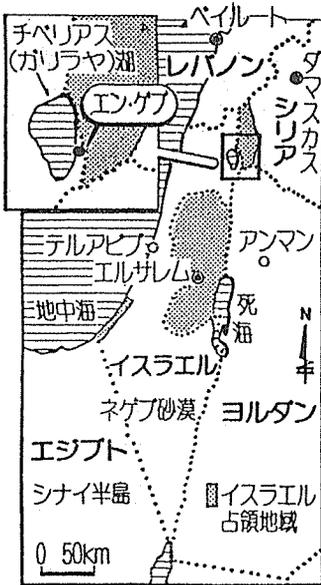
一 はじめに

わが国の有志研究者で組織する「聖書考古学発掘調査団」（会長・金関 恕「ひろし」天理大学教授）は、文部省科学研究費国際学術研究として、一九九〇年から一九九二年まで三年にわたって、毎夏約二カ月間、イスラエル国北部のエン・ゲブ遺跡の発掘調査を行った。筆者はこのうち第二回（一九九一年）と第三回（一九九二年）の調査に参加することができた。なお、調査結果は現在なお分析中であり、いずれ調査団としての正式の報告書がまとめられる予定である。本稿はあくまで、出土物に対する所見や評価を含め、著者個人の暫定的な体験報告

であることをお断りしておく。

二 位置

エン・ゲブ遺跡は、ガリラヤ湖の東湖岸に位置する南北約二百五十メートル、東西約百二十メートルのテル（遺跡丘）である。旧約聖書で「ゲシュル」と呼ばれるガリラヤ湖東岸地方一帯は、現在いわゆる占領地であるゴラン高原を含み、イスラエル、シリア、ヨルダンの国境が接する政治的に微妙な問題を含む地域なので（地図参照）、これまで考古学調査はほとんど行われてこなかった。ゴラン高原のふもとにあるエン・ゲブ遺跡自体も、



イスラエルとエン・ゲブ

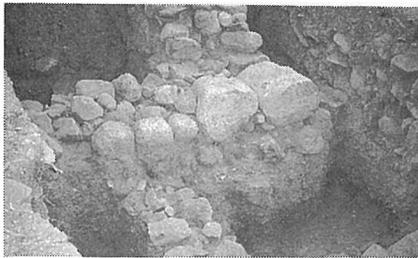
一九六一年にB・マザールらのイスラエル隊が十一日間にわたってテルのふもと三箇所を試掘したが、その後テル本体には手が着けられず放置されていた。

三 一年目（一九九〇年）

著者自身は公私の事情で一年目の調査には参加できなかったが、二年目の調査は一年目の調査の終了時の状態から始まったのであるから、その時点での所見と、同僚研究者からの伝聞や調査結果の図面に基づき、一年目の成果についても簡単にまとめておきたい。この年は、テル北側に位置する頂上部分から東に向かうゆるやかな斜



写真① 居住層の重なり。一番上のヘレニズム時代の層とその下の鉄器時代の層では建物の方向が異なる。さらにその下により古い（王国時代初頭？）の層が見える。



写真② 王国時代中葉の層から発見された大規模な建物跡。右側に「隅の親石」が見られる。

面に、隣接し合う一辺約五メートルの正方形のトレンチ（試掘壕）五つ（計約百平方メートル、深さ約一・八メートルまで）を掘り、鉄器時代初期（イスラエル王国時代初頭）からローマ時代以降にまで至る四層ないし五層の居住層を確認した（写真①を参照）。これは、当該遺跡がほぼ聖書時代の全期間にわたって居住され続けた、かなり重要な都市であったことを示唆するものと考えられる。特に注目には値するのは、王国時代中葉（前八世紀前後）に当たると思われる第三層から、長さ十五メートル

以上におよぶかなり大規模な公共的建築物の基底部と思われるものが出土したことで、これは丸石積みで幅約一・三メートルあり、角の部分には典型的な「隅の親石」が見られる。この上に日乾レンガによる建物本体が載っていたと考えられる（写真②を参照）。

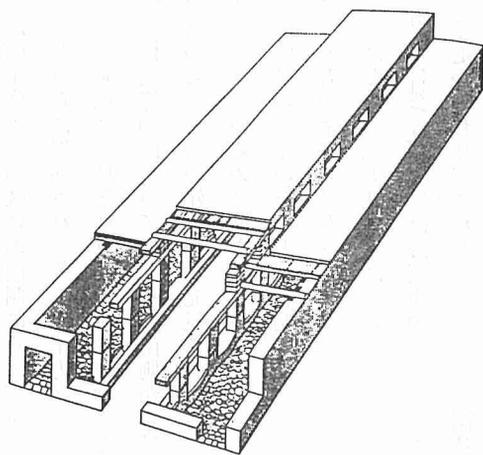
四 二年目（一九九一年）

湾岸戦争をはさんで行われた二年目の調査では、一年目の調査区域の東西に各一つ、南側に平行して五つの、計七つのトレンチ（約百七十平方メートル）が追加された。この年の調査では、二つのかなり重要な成果が得られた。一つは、新たに掘られた南側の地区から、二列の平行した石柱列（砂岩製、柱の幅約五十センチ、高さ約一・二～一・四メートル。北側に七本、南側に三本が残存）



写真③ 二年目に発見された石柱列と著者。

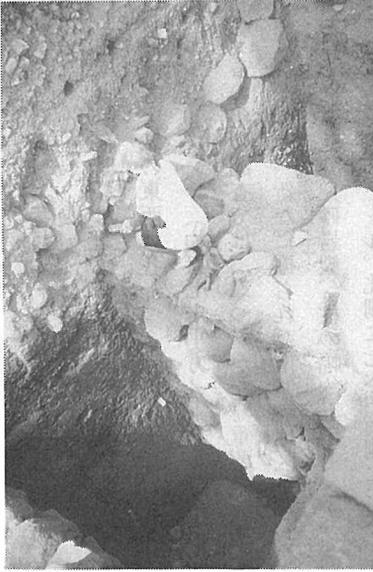
が出土し（写真③を参照）、一年目の第三層で発見された建築物基底部分が、いわゆる「三廊・列柱式建物」の外壁であったことが確認されたことである。すなわち列柱は建物内部で木製の柱を支える乾レンガ製の柱を支える土台であり、柱は採光用



三廊・列柱式建物の再構成図

の天窓を持つ天井を支えていたものと思われる（再構成図を参照）。柱によって区切られた両側の側廊に当たる部分の床面は、平らな石で舗装されていた。このような構造の建築物は、ハツォル（写真④を参照）、メギド、ベエルシェバ等の各地の重要な都市跡でも発見されており、その用途については馬小屋、倉庫、市場等、学界でも議論が分かれている。

第二は、一年目の区域の東側に新たに掘られたトレン



写真⑤ 王国時代初期の層から発見されたいわゆる「ソロモンの大城壁」。



写真④ 参考資料。ハツォルから発見された三廊・列柱式建物の跡。

チから、丸石積みみの非常に大規模な城壁跡（幅約一・七メートル、高さ約三・六メートル）が発見されたことである（写真⑤を参照）。城壁の基底部は現在の地表から五メートル以上も下にあり、深さから見て王国時代初期（ソロモン時代？）のもの

と思われる。いずれにせよ以上の二つの発見は、当該遺跡が単なる村落の規模を越えた重要な都市であり、おそらくはこの地方全体の行政・通商の中心地であったことを裏付けるものと考えられる。なお、この年の発掘の成果はわが国の新聞等に広く取り上げられた（例えば北海道新聞一九九一年九月二日朝刊）。

五 三年目（一九九二年）

三年目には前年度までの区域の南側に入つ、東側に二つのトレンチがさらに追加され（約二百平方メートル）、二年目の二つの発見にそれぞれ重要な所見が付け加えられた。まず列柱式建物については、その南側からほぼ同一の構造を持つもう一つの建物跡が発見され、この建物が単独で建てられているのではなく、少なくとも二つ以上が横並びに建てられていることが判明した（したがって、ハツォルのものよりもメギド、ベエルシエバのタイプに近いことになる）。「大城壁」についても、その東側（すなわち町から見て外側）にほぼ同規模のもう一本の城壁が平行して走っており、これがイスラエル王国時代の



写真⑥ 3年目の調査終了時の遺跡全景。北東の方角より見る。手前の深い層にケースメート(二重式)城壁。その後方のより新しい層に列柱式建物跡。その左手に見える新たに発掘された第2の建物跡は破損がより著しく、石柱はすべて破損したり、倒れている。

も大規模なケースメート城壁の一つであり、外壁に当たる東側の城壁の表面には漆喰が塗られていた(写真⑥を参照)。

六 同定

エン・ゲブ遺跡は、旧約聖書に挙げられているどの町に当たるのであろうか。列王記上二〇章や同下一三章によれば、前九世紀中葉から前八世紀初頭にかけて、ガラヤ湖東岸地方では、サマリヤを都とするイスラエル

初期に特徴的な、間に部屋状の空間を持つ二重式城壁

(いわゆる「ケースメート城壁」)であることが確認された。これは、この時代のものとしては、パレスチナでは、パレスチナで発見されている最

(北)王国とダマスコを都とするアラム王国の間で領土争いが繰り返されており、その際にこの地方の中心地である「アフエク」という町が重要な役割を演じていたことが読み取れる。特に上二〇章では、戦いに敗れたアラム兵「二万七千人」がこの町に逃げ込み、彼らの上に「城壁」が崩れ落ちたとされている。膨大な兵員の数字は、旧約聖書でこのような場合によく見られる誇張であるにせよ、ここからはアフエクが、大規模な城壁を持つ大都市だったことが窺われる。アフエクの同定については従来から確たる定説がなかったが、エン・ゲブ遺跡は時代的にも、場所的にも、町の規模から見ても、城壁を伴う構造から見ても、旧アフエクの候補地として申し分のない資格を持つといえよう。現在、ガラヤ湖東岸の主要なテルで各国の調査隊により平行的に発掘が行われているが、少なくとも今のところ、時代と大きさから見て有力な対抗馬となる候補地は見つかっていない。

七 おわりに

これまでの調査はテル全体のほんの一部を明らかにし

たにすぎない。類例から見て、列柱式建物は町の城門近くに建てられる場合が多く、したがってエン・ゲブの場合にも、ケースメート城壁の延長部分に城門が発見される可能性が高い。また、アフエクとの同定を裏付ける碑文資料の出土が期待される。いずれにせよ、エン・ゲブ遺跡の発掘は、旧約聖書に描かれた王国時代の歴史の背景をさまざまな面から解明してくれるであろう。今後の調査の実り豊かならんことを期待して止まない。